

# パラスポーツ

を通して

## 共生社会の実現を目指す 東京都立大学の取り組み

パラスポーツの普及と共生社会の実現を目指し、2017年からさまざまな活動に取り組み東京都立大学。さらにはコロナ禍での動画配信など、継続する活動内容を紹介します。

取材・文／編集部 写真／高橋淳司、中里慎一郎、東京都立大学 編集部

東京パラリンピック開催が3年後に迫った2017年、東京都立大学（以下、都立大）健康福祉学部は最初のパラスポーツ体験教室を開催した。種目はポッチャ。前年のリオ大会でのメダル獲得で一躍注目されたポッチャは、障がいの有無、性別、年齢、体力などに関係なく楽しめる、パラスポーツ普及のためにはうってつけの種目である。

当時、パラスポーツに対する世間の理解は、それほど浸透していなかった。そのなか、東京オリパラ開催を控え「スポーツ都市東京の実現」を掲げていた東京都の意向に沿う形で、スポーツ気運を醸成してパラスポーツの裾野を広げることに都立大は主眼を置いた。学術研究機関としての根拠や研究に基づき、障がい者がより安心してスポーツを楽しむことができれば、結果としてパラスポーツの裾野拡大につながる。そんな想いもあった。



**ポッチャ**  
パラスポーツ体験教室はポッチャから始まった

ひとりでも多くの人にパラスポーツを通して障がい者や共生社会について知ってもらおう。この目標のもと、体験教室ではパラリンピック競技を中心にポッチャ以外の種目も行われた。その活動はキャンパスのある荒川区民を中心に、「パラスポーツを初めて知った」「障がい者と健常者が一緒にできて楽しい」など徐々に広がりを見せていった。

ボールなどのニュースポーツや視覚障がいスポーツなどの種目を増やし、また種目ごとにメイインターゲット層を想定。特に次代を担う小中学生やその保護者に呼びかけ、参加者の年齢層は一気に広がることとなる。

体験会と並行して、パラアスリートやゲストに呼んでの講演会やイベントも実施した。また、独自にポッチャロボットを開発するなど、その活動は多岐にわたり、2020年1月には学部長杯と名付けたポッチャ大会を開催。さらに、キャンパスを出てマラソン大会にブースを出展するなど、活動を広げていった。



お楽しみ健康体操



ペガーボール



スポーツウエルネス吹矢



車いすバスケットボール

開催を重ねるごとに種目を増やし、パラリンピック競技以外のパラスポーツも行われた。実施した種目数はこれまで15。さまざまなスポーツを体験することで、障がいに対する理解を深めてもらうことが目的だ

## パラスポーツ 講演会&体験教室

アイドルの猪狩ともかさん、パラリンピアン野島弘さんらをゲストに招き、2019年3月に開催された講演会&体験教室には、子どもからお年寄りまで約100名が参加。「パラスポーツを楽しむこと」をテーマに行われたトークセッションでは、パラスポーツに関する興味深い話が飛び交った。その後、体育館に移動してポッチャを体験。参加者はポッチャの魅力を堪能した様子だった。



パラスポーツに初めて触れる参加者も多かったが、猪狩さんと野島さんの軽快なトークとポッチャのおもしろさにあっという間に時間が過ぎ、笑顔と歓声が絶えないイベントとなった



## 健康福祉学部長杯ポッチャフェス

パラスポーツを体験するだけでなく、競技として楽しむ。そんな発想から2020年1月に開催に至ったのが「健康福祉学部長杯ポッチャフェス」。参加した22チームは、グループに分かれたリーグ戦を経て、順位を決めるトーナメントを戦った。



参加者が全員、同じ土俵で真剣勝負をした

勝敗をつけることで集中力や楽しさが高まり、スポーツの魅力を十分に味わえるイベントとなった。ポッチャはやっぱり盛り上がる！



成績上位チームには記念品が贈られた(右)。普通にやっても楽しいポッチャが、大会になることでさらに盛り上がり、参加者も満足した様子だった(左)

## テコンドー選手による 講演と実演

2019年11月には、東京パラリンピックから正式種目になったパラテコンドーの講演会を開催。シドニー五輪銅メダルの岡本依子さんとパラテコンドーのトップ選手が招かれ、トークショー、デモンストレーション、競技体験が行われた。



ステージではパラテコンドーの選手たちが実技を披露

普段は触れることが少ないテコンドーの世界に参加者は興味津々。岡本さんの明るいトークに乗り、その迫力と魅力に引き込まれる時間だった。

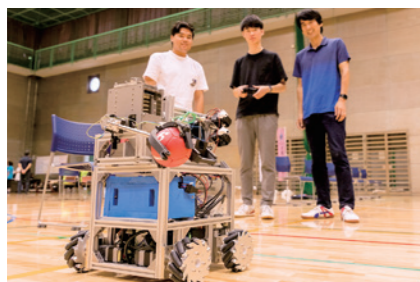


シドニー五輪銅メダルの岡本依子さんのほか、パラテコンドー選手の重水さん、鴨脚さん、石原さん(左から)がゲスト出演



## 東京都立大学が開発する「ポッチャロボット」

都立大が開発に取り組んでいる「ポッチャロボット」。ポッチャボールの投球ができる日本で初めてのマシンで、搭載されたレーザーポインタやアームの角度で正確なコントロールを実現する。ポッチャ体験教室にも「参加」して、人間の対戦相手になることも。ロボットというひとつのハブを介することで楽しみが広がる。これもパラスポーツならではのかもしれない。



開発にかかわったのは、システムデザイン学部の武居直行准教授と学生たち(上)。ゲーム機でも使うコントローラで操作する(右下)。ロボットとの対戦、一度はやってみよう(左下)



# 東京都立大 × パラアスリート 動画配信プロジェクト

## 日本代表のエース!

### 車いすラグビー・池崎大輔選手

東京パラリンピックでは車いすラグビー銅メダル獲得の原動力として活躍した池崎選手。大会期間中、この動画の再生回数が急激に伸びたことから人気ぶりがかがえる。先天的な進行性障がいを抱えているが、いつも明るく、力強い池崎選手とのトークは、何が飛び出すかわからないスリリングさもあり、必見だ。



車いすバスケと車いすラグビーを体験した違いについての話もあり、池崎選手のキャラが満載の仕上がりになっている



## パラスポーツをもっと身近に!

### 陸上走り高跳び・鈴木徹選手

大学が実施するアンケートで、興味のあるパラ競技の上位にいつもランクされる陸上。そこで第1回目は鈴木選手に依頼し、競技との出会いや学生時代のこと、パラリンピックなどについて話を聞いた。実際に義足や車いすで走ったり跳んだりするのはむずかしく、体験はなかなかできないが、鈴木選手のリアルな話はとても興味深い。



とても紳士的に対応してくれた鈴木選手。2000年のシドニー大会で、日本人として初めて競技用義足を装着して出場した選手としても有名だ



## 車いすテニス界の新星!

### 車いすテニス・大谷桃子選手

東京パラリンピックでは、女子ダブルスで見事銅メダルを獲得した大谷選手。インタビュー取材は地元佐賀県までお邪魔して行った。インターハイに出場したテニス選手だったが、高校卒業後、病気のため車いす生活に。その障がい乗り越えて現在に至るまでのストーリーを、大いに語ってくれている。



競技中の勝負師のイメージとは違い、あどけなさが印象的だった大谷選手。実際にテニスをプレーするシーンも撮影している



## まさに鉄人アスリート!

### パラトライアスロン・土田和歌子選手

脊髄を損傷して最初に始めたのがアイススレッジスピードレース。1998年長野パラリンピックでは4個のメダルを獲得した。その後陸上競技に転向し、シドニーから東京まで連続出場して3個のメダルに輝く、まさに「鉄人」の土田選手。豊富な経験に基づく話は、パラスポーツの魅力に引き込んでくれる。



カメラが回っていないときは家族の話を楽しそうにしてくれるなど、とてもチャーミングな人柄が印象的だった

## コロナ禍での苦心と パラリンピック後の活動

コロナ禍により計画変更を余儀なくされたのは、都立大のバラスポーツ普及活動も例外ではない。世の中は対面を避け、オンラインの流れに。バラスポーツ体験は実際に本人がやってみないと面白味が伝わりにくいからと言って、コロナ禍が過ぎ去るのを待つだけでは何も前進まない。

こんな状況下で、都立大は逆転の発想をした。オンラインを活用して今までは違う概念や発想の表現をすることで、新しい体験層を開拓できるのではないかと、ネット配信なら時間や場所に関係なく活動を知ってもらい、バラスポーツの理解につながる機会が増えるのではないかと考えたのだ。

ここでまず始めたのが、パラアスリートのインタビュー動画配信だ。背景には2017年に東京都が行ったアンケート結果があった。「バラスポーツに関心がないのはなぜか?」という質問に、一番多かったのが「どんな選手がいるかわからない」という答えだったという。この問題の解決につながる動画を作るため、パラリンピック6大会出場の鈴木徹選手(走り高跳び)から動画制作を始めた。都立大のパラアスリート動画は、選手自身にルールや使用する器具・道具などの解説をしてもらい、競技についての理解をより深めてもらうことが特徴のひとつ。パラリンピック期間中には、1日

「コロナに負けない!」

パラ  
スポーツ

動画配信  
プロジェクト

で数百回の視聴回数を記録したコンテンツもあったという。その後、下に紹介したブログラムが次々と配信された。コロナ収束に現実味が出てきた今後は、デフ(聴覚障がい)スポーツ、バラスポーツ競技会観戦ツアーなどを企画していく予定だという。その活動に引き続き注目していきたい。

## [特別企画] 都立大生 × パラアスリートによる オンライン座談会



現役学生の参加により、素朴な疑問に触れる内容も多くなっている

パラアスリートのほか、都立大の現役の理学療法学科の学生に協力してもらいセッションを展開。パラアスリートがどうやって障がいを乗り越えたかなど、思わず聞き入ってしまうテーマにも触れた。収録終了後、大学卒業後もバラスポーツにかかわりを持っていきたいという学生の感想が聞かれた。

## 東京都立大学 健康福祉学部 特任助教の「おうち体操」



コロナ禍でなかなか外出できない人や、運動する機会が減った人を対象に、家の中でも簡単にできる体操を紹介。考案したのは2021年3月まで都立大特任助教を務めた神保秀久先生。椅子に座ったままできるメニューも多く、障がい者でも無理なくできる内容だ。

考案者の神保先生はバラスポーツ体験教師の講師も務めている

## [特別イベント] パラアスリート&義足ダンサー座談会

東京パラリンピック開会式にも出演した義足ダンサー大前光市さんをはじめ、視覚や聴覚に障がいをもつアスリートを招いて行った座談会。健常者のダンスに近づけるのではなく、障がいがあるのが自分なんだと考えるようになってからパフォーマンスが良くなったという大前さんの言葉が印象的だ。中高生で進路に悩んでいる人に向けた言葉もある素敵な内容。



東京パラリンピックでの大前光市さんの華麗で力強いパフォーマンスは多くの人の印象に残った(上)。ケイアイスター不動産パラアスリートチームのメンバーも出演(左)